

小児・AYA世代のがんについて

(AYA = Adolescent and Young Adult, 思春期・若年成人)

小児がんの治療は進歩していて、小児がん経験者の70%以上が治癒し、多くの方が成人しています。

しかし、心や身体の成長途中に、抗がん剤や放射線などの治療を受けるため、治療が終わって何年もしてから、治療の影響による合併症が起こることがあります。

そのため、長く、上手にお付き合いしていかなければならない病気でもあります。病気のこと、治療のこと、治療が終わってからのことをきちんと知っておく必要があります。

冊子

千葉県では、小児がん患者とその家族が適切な医療や支援を受けられるように、小児がん患者・家族向け情報誌「安心して闘病生活を送るために」を作成しました。

医療機関の情報や、福祉、教育、生活のことなどの情報が一冊にまとまっています。



小児がん診療に係る医療機関実態調査

小児がん患者とそのご家族及び小児がん経験者の方が可能な限り慣れ親しんだ地域での治療や支援、長期フォローアップが受けられる環境の整備を検討していくため、県内の医療体制等を調査し、千葉県ホームページ上で公表しています。



相談窓口

小児がんに関する相談は、がん相談支援センター等で対応しています。

詳しい問い合わせ等については、小児がん患者・家族向け情報誌「安心して闘病生活を送るために」P.29（病院の相談窓口）をご覧ください。

皆さん、「妊孕性（にんようせい）」という言葉をご存知でしょうか。お子さんを授かるための力のことです。

がんと診断され治療を受けた方のうち約56%が10年以上の生存率を実現する時代となった今、がん医療の現場では、若い患者さんの治療後の妊娠・出産の実現を願い、治療前の妊孕性を温存しようという働きが活発になりつつあります。

皆さんに知ってほしいこと

20代、30代でがんと診断された方に、是非、知っておいていただきたいことが2つあります。

ひとつは、がん治療の内容によっては、お子さんを授かる力が弱まることや失う可能性があるということです。

ふたつめは、がん治療前に卵子凍結をした患者さんが、治療後に体外受精を行い無事出産する例は、すでに世界で1000人を超えている（米国臨床腫瘍学会より）という事実です。

妊孕性に影響を与える治療

これまで行われた研究で、治療の種類や内容により妊孕性に与える影響は異なることや、がんの部位によっては、卵子保存や精子保存の処置を行うこと自体が身体に良くない影響を与えることが明らかになっています。（参考：日本がん・生殖医療学会ホームページなど）

皆さんにお願いしたいこと

がんと診断されるまで、「この歳でいのちに関わる病気になるなんて、思ってもみなかった」、「妊娠や出産のことを考えてもいなかった」という方も多いでしょう。また、がんの告知の時点で将来設計まで考えられない状況にあるかもしれません。

妊孕性の温存は、治療前に行うことが重要です。治療前に少しでも将来的にお子さんがほしいと考えているのであれば、その希望をまず主治医に伝えるようにしてください。

もし、通院しておられる病院が妊孕性に詳しくない場合は、専門家のいる医療機関を紹介して下さるはずです。また、主治医と話す前に気持ちを整理したい、という場合は、お気軽にがん相談支援センターや千葉県がん・生殖医療相談支援センターにお声掛けください。

主治医と連携しながら、お近くの専門医をお探しするお手伝いをさせていただきます。千葉県がん・生殖医療相談支援センター（直通 043-226-2749）



◎ P20の「6 妊孕性（にんようせい）温存療法を受ける予定の方」もご覧ください。

